

或るところに、生徒たちとその先生、そして勉強中の彼の娘がいた。3人の少年がいたが、彼らの誰もが、娘に教えに行くたびに結婚を約束した。3人の少年は勉強を続けるために国を離れ、そして戻ってきた時には商人になっていた。

或る日、少年のひとりが道を歩いていた時、小さな鏡を見つけた。彼が値段を聞くと5ユーロと言われ、彼はそれを買った。二人目の少年も同じように通りを歩いていたが、祈祷用の絨毯を見つけた。値段を聞くと3ユーロで、彼はそれを買った。3番目の少年は通りで護符を見つけ、2ユーロでそれを買った。

3人の少年はほどなく会って、彼らの買い物について議論した。ひとりがもうひとりに聞いた。

「君は何を買ったんだい？」。

そこで、聞かれた方は答えた。

「小さな鏡」。

「祈祷用の絨毯」。

「護符」。

少年のひとりが聞いた。

「この小さな鏡は何の役に立つんだい？」。

買った少年は答えた。

「この鏡は、僕が中を覗くと村で起こっていることすべてが見えるんだ。死んだ人がいるとか、何か重大な、大事なことが起こったとかね。ところで君のお祈り用の絨毯は何の役に立つのかな」。

もうひとりは答えた。

「この絨毯は、3人でどこでも好きなところへ行けるんだ。ところで[彼は最後の少年に聞いた]、そのお守りは何の役に立つんだい？」。

最後の少年は答えた。

「このお守りは、いつか病気になったり怪我をした時に、香りを嗅ぐだけで回復するんだ」。

最初の少年が鏡の中を覗くと、彼らの先生の娘の死が見えた。3人は絨毯に飛び乗って村に着いた。着いた後、先生の娘は、お守りの臭いを嗅いで回復した。娘は助かったのだ。3人の少年は、それぞれが娘の命を救ったとして、誰が娘と結婚するかで口論を始めた。先生はどうすることも出来ず、長い間喧嘩が続いたので、先生は状況をどうしたらいいかわからず、彼らに帰るよう命じた。

先生は、決定を下せるように彼らを判定することにした。彼は山羊と猫を捕まえて人間の姿にして、娘に似せた。それから彼は3人を呼んで、それぞれ未来の妻を選ぶよう命じた。本物を選ぶ幸運を得た者が、彼女と結婚することになるわけである。

というわけで、3人はそれぞれ3人の中からひとりを選んだが、3人ともまったく同じように見えたので、娘の父である先生も、どれが本物かわからなくなってしまった。結局は、それぞれがひとりを選んで一緒に出立し、結婚した。しかし、父親は自分の本物の娘が誰と一緒に出発し、誰が彼女を選んだのかを知りたかった。

彼は、3人のうちのひとりの少年の家を訪ね、挨拶をして尋ねた。

「ここでは万事うまく行っているかな。何か問題がなければいいのだが」。

少年は答えた。

「先生、ひとつ大きな問題があります。私が魚を買ってきて冷蔵庫に入れる度に、戻ってみるとあなたの娘さんが全部生で食べてしまっているのです」。

父親は、これで猫だとわかった。

彼は続いて山羊を選んだ少年の家に行って、挨拶の後、同じ質問をした。

「万事順調で、特に問題はないと思うが？」。

少年は答えた。

「先生、私は妻のことで心配があります。私が小屋を建てる度に、彼女はすぐさまそれを壊してしまうのです。柱を齧りながら。おまけに、彼女はテーブルについて食事するのを嫌がり、地面で食べたがります」。

父親は、山羊を選んだのはこの少年だとわかり、残った最後の男の家に行くために出発した。

彼は最後の家に着いて挨拶の後言った。

「君はここで何の問題も抱えていないことを私は知っている。私の本物の娘の家だからだ。君は彼女を選ぶ機会を得たし、これからもこの家では何の心配もないことをわかっている」。